

## 小学生時代のエピソード

小学校低学年、いつも集合が一番最後。それなのに焦らず悠々と登場するって言われていた超「マイペースくん」。今は時間をきっちり守れる「時計くん」。

低学年の時、ゲームで負ける、競争で取り合うものが取れないとすぐ泣いた。対策として、家族内でボードゲーム真剣勝負・例えばお菓子を選ぶのも必ずジャンケンなど簡単には譲らないことで慣れさせた。

タバコを吸っている人の横を通り過ぎる時、鼻を手で押さえてあからさまに迷惑という態度だった。けど、今は『仕方ないよ。嗜好品だもの。』と言える。

息子はパーソナルスペースが広いタイプ、成長してもあまり変わらない。その分トラブルは少ないし、人を傷つけることも言わない。

小学校時代、友達にからかわれると顔を真っ赤にして怒るから「パプリカ」と呼ばれていたらしい（緑→黄色→赤に変わるから）。けど、今はその頃の自分を思い出すと恥ずかしいんだって！成長してるじゃん。

小1～5までの家庭での夕食は、こだわりで、納豆・マグロ丼しか食べなかったの、母は常にマグロを冷凍備蓄していました。

大きい音が苦手なのに自分は急に大きい声を出すので驚かされる。

高学年の組体操について。2人組倒立中、笛の合図タイミングが分からず、急に手を離されてバランスを崩して、ケガをしてしまった。本人は笛がなるまでのカウントがわからず、鳴ってからすぐ動くのか、笛が鳴り終わってから動くのか…本人のカウントやタイミング等の確認の共有をしておくとか減るかなと思いました。

6年の担任の先生はベテランで、息子達は教員生活最後の教え子でした。中学受験を迷っていた時、「これからの教育はできることを伸ばすことに力を入れていく。」と息子の中学受験を後押ししてくれました。

## 中学生時代のエピソード

急な雨で傘が1本しかない時、自分だけさして行ってしまい、付き添いは濡れる。

遠出の時は、非常用携帯トイレを持って行った。

修学旅行の時も移動中に見る本など持って行った。

忘れ物をしない対策なのか、ほぼ全ての教科書をリュックに入れて通学。めちゃくちゃ重い。家族内で二宮金次郎と呼ばれていた。

母が自分の資格の勉強に注力しすぎて、声かけするのをしなかったら、始業式を忘れて行かなかった。母凹む。

修学旅行のエピソード。グループ自由行動にて偶数人グループでなかったのが1人になってしまい、担当タクシー運転手さんとまわることに。それはそれで楽しかったらしい。

## 高校生時代のエピソード

特性について自己理解した高2の夏。息子がかけてくれた言葉。『お母さん悩んでいたでしょ？どうして言ってくれなかったの？言ってくれたら僕も一緒に悩めたよ。』

特性理解も手伝ってか、大学の学部選択は譲らなかった。『好きな学問でない、大学行かなくなっちゃう気がする。それに大学って好きな学問を深める場でしょ？』ごもともです。

幼少期の出来事にとらわれて、いつも心配、心配と言葉にしていたら、高校卒業時の息子から親へのメッセージが『心配ばかりかけてごめんね。』だった。母反省。



## 私学中高一貫校のエピソード

高校受験がないために中学の私学受験をしました。当時は近くの公立中学校以外を受験する人は5年生の頃に担任の先生から申し出るように言われました。

高校受験がないので6年間好きなことに専念する時間が取れると思います。

本人の持つ雰囲気と校風が合うととても良いとは思いますが、家庭の協力を求められることも多いので家庭の方針と学校の方針が合うといいかも。合わないと思ったらと思う。私学は公立という受け皿があるので、退学になることもありますね。入ったら安泰ということでもない感じ。

うちの子が通っていたときは、特別な対応にはスキルは足りないと思いました。今は受験での配慮もあると聞きます。先生たちはとても親切で小学校とのギャップが少ないような気がします。

働いていたので土曜日に授業があることや参観会も土曜日にあるのはありがたかった。

修学旅行や遠足は遠方が多い。一人で公共の交通機関が使えないと厳しいかも。とても楽しそうだった。自由行動も多い。いつも「学校はチャレンジャーだな。」と思っていた。

似たような子もいるし他にも色々な子がいる。外国籍の子もいるし。学校でのクリスマス会やハロウィーンのことを息子から話を聞いていると楽しかった。

『学区の友達がいなくてかわいそうだね。』と言われ、公立小学校を選択したけど、結局友達とあまり遊ばなかった。これなら中学から私学もありかなと、小学校2年生から検討して、見学を始めた。気に入った学校は何度も足を運んだ。

ある中高一貫校は、友達が6年間一緒。人見知りのタイプだが、さすがに友達ができる。担任も中高の中で同じ先生方がぐるぐる配置されていた。先生方も子どもの性格やカラーをよく知ってくれていて、進路選択の助言もなかなか的を得ていた。

たまに凸凹の子の保護者に『中学受験して良かったですか？』と尋ねられる。いつも『うちは結果的には良かったけど、こればかりは行ってみないとわからない。』と伝えている。どこの学校にしようかと親子で一生懸命考えて出した結論が、その時の最善。子どもには『学校どうしても嫌だと思ったら言ってね。世界は広いよ。別の学校にいつでも変われるからね。』と伝えていた。

受験が近づくにつれて、家庭でも過去問を解いた。夫がワードで作成した注意事項『氏名を書くこと、最後まで文章題を読むこと・・・』等を読ませてから過去問を解かせた。